



名  
又  
占  
占  
占  
占



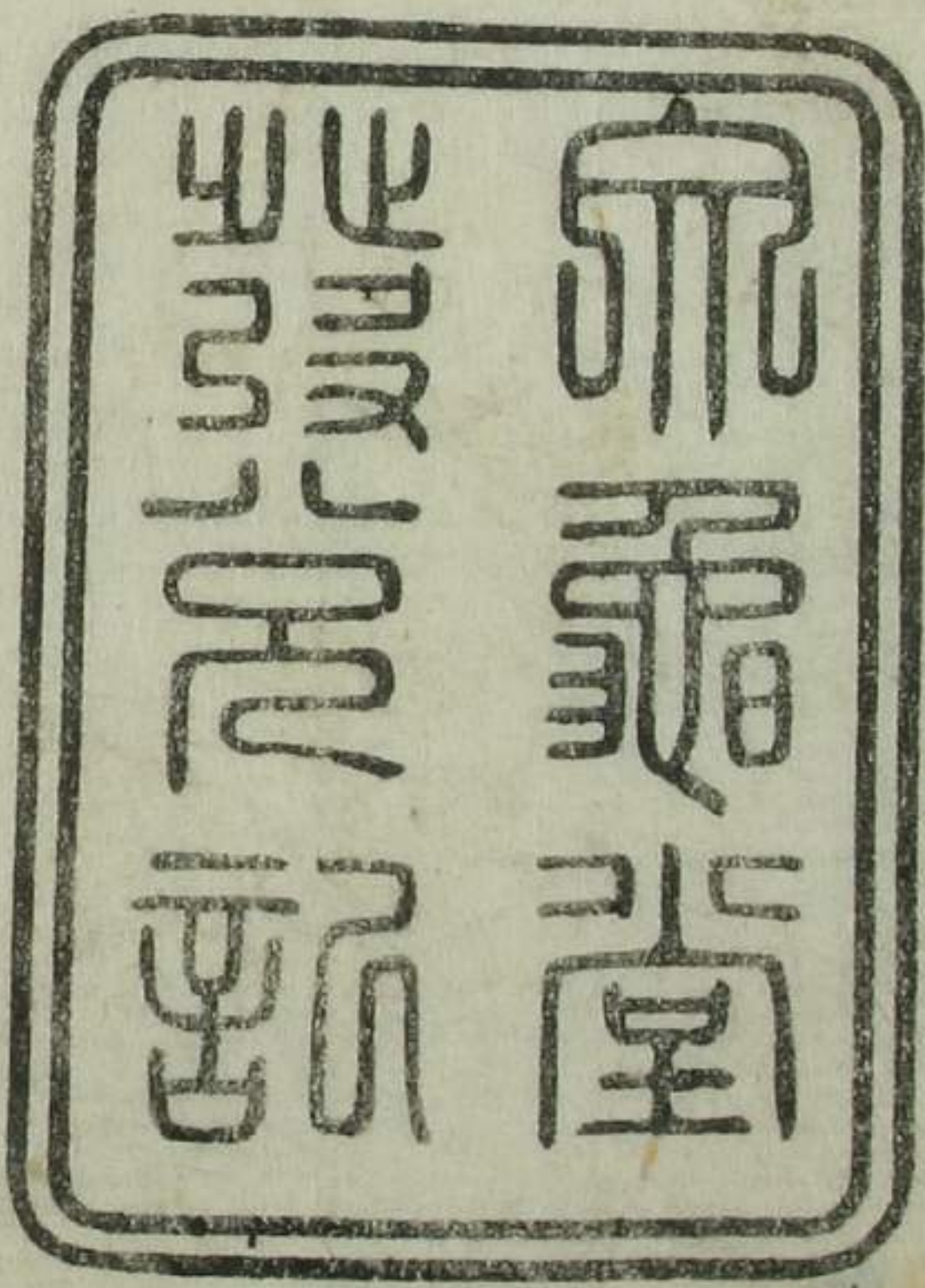
門へ通3  
2418

腹筋逢夢  
石餘真

坐敷  
藝忠  
臣藏

繪入讀本  
全一冊

山東京傳戲作



文龜堂梓行

歌川豊國戲画

坐敷藝忠臣藏序

大正五年十月三日  
室井平藏氏贈

玉置屋

寒中の皫皫吹雪の中の河豚汁とんきでん乃事と。  
称養せし冬籠は戲作の新板はらんといふと金屋の  
松の古枝をまらして囲炉裏よりとんでいふ名をらんして  
麥つき歌乃麥茶をとて。安行燈のわくろをとりして。  
此長の夜をまらしくと起て居てもわらぬ眼鏡や鳥の  
夜目がきくさびば自笑もおぢら。おひひつるる讀本  
八文字屋のそとくもゆきど。一文字屋の智恵もどかす



Handwritten text at the top of the left page, likely a title or chapter heading.



合成ノ隨フ火  
風ノ一曲勾  
欄曲終テ後  
本然大地  
忽チ為ル空  
其角白

Handwritten text at the bottom of the left page.

Handwritten text at the top of the right page, likely a title or chapter heading.



舞臺ノ  
木ノ偶  
之  
抽牽ハ者  
即チ主人  
公。地ノ水

Handwritten text at the bottom of the right page.



こつてい思案<sup>おん</sup>よあさるごとし。烟草<sup>たばこ</sup>でうかく考<sup>かん</sup>て。獅子<sup>しし</sup>  
鑰石<sup>よくせき</sup>の烟管<sup>えんくわん</sup>の火皿<sup>ひざら</sup>とけるをうで趣向<sup>きゆうきゆう</sup>いへうぬど。わんじ  
案<sup>あん</sup>トふ月<sup>つき</sup>の入山<sup>いりやま</sup>もかより一里半息<sup>いちりはんいき</sup>ときらるる力<sup>ちから</sup>跡<sup>あと</sup>のどく。  
文箱<sup>ぶんばう</sup>りてて版元<sup>はんげん</sup>の催促<sup>さいそく</sup>い毎日<sup>まいにち</sup>あり。そふで虚<sup>うそ</sup>りし出<sup>で</sup>と  
實<sup>まこと</sup>であるれを根<sup>ね</sup>いどげまんと明日<sup>あした</sup>あつてといひのべる。一寸<sup>いっせん</sup>  
のぐれの万八<sup>まんぱち</sup>をさや伊賀屋<sup>いがや</sup>氣<sup>き</sup>の長い版元<sup>はんげん</sup>も。勘右衛門<sup>かんゑもん</sup>袋<sup>ふくろ</sup>の  
緒<sup>お</sup>がきれて自身<sup>おんみづか</sup>も馬<sup>うま</sup>を糸<sup>いと</sup>出<sup>で</sup>し。節季<sup>せつき</sup>師走<sup>しそ</sup>の賣物<sup>うりもの</sup>ハ  
一日<sup>いちにち</sup>ちぐべれこづくらふと。理屈<sup>りくつ</sup>の詞<sup>ことば</sup>ぐあふか。ぶくあやまり

入<sup>いり</sup>ましこと。地口<sup>ぢぐち</sup>でもあく作<sup>さく</sup>でもあく。あやうしほしは書綴<sup>うらつひ</sup>  
種本<sup>たねほん</sup>それへおろしやと。自身<sup>おんみづか</sup>も氣<sup>き</sup>とつけ校合<sup>きやうがふ</sup>われと  
あひわれを版元<sup>はんげん</sup>いへうとく。からてんかてん。全部<sup>ぜんぶ</sup>上木<sup>じやうぎ</sup>とる  
まてい衣<sup>え</sup>奠<sup>ま</sup>ふも喰<sup>く</sup>さぬ此種本<sup>こゝろたねほん</sup>と懐<sup>なつか</sup>ふしと飯<sup>い</sup>りり。かろ  
手誥<sup>てご</sup>の作<sup>さく</sup>われを。ゆめんゆへたふく

山東京傳戲誌



文化七年庚午春待月







序切

乃井ちろは林に多るる男  
おとくはさくら入またりなれを  
ひら多下こ多るけおさく

ちろあや  
せんび



ちろあや  
せんび  
そのま  
うら  
ひら  
せん

乃井ちろは林に多るる男  
おとくはさくら入またりなれを  
ひら多下こ多るけおさく  
ちろあやせんび  
せんび



乃井ちろは林に多るる男  
おとくはさくら入またりなれを  
ひら多下こ多るけおさく  
ちろあやせんび  
せんび

乃井ちろは林に多るる男  
おとくはさくら入またりなれを  
ひら多下こ多るけおさく  
ちろあやせんび  
せんび











































































後序

損料乃史記も師走の螢も。隠者の夜学  
 うべなるか。市中の隠の住家の雪をうめる空地も  
 う。螢をのひる。廣庭もあをを。真の油をつゆしと  
 夜もさう。机もひひ。此讀本の稿成て。つぐ年の  
 うま取れり。宗。年浪のまう。人の額もよせて。半白乃  
 霜の頭もおき。ひけ取の腰も光陰の矢もつと。紙をを。  
 餅花の枝も月日の崩も。往來の音もおのづう

せうく。袴きぬ。婿入もわを。見支も出立山伏  
 もわり。素足の奴の脚をつみ。鴨もつぐ。人薄着の  
 下女の昆布巻のわね着を羨む。寒垢離乃腹の隅田  
 川の樽もひとく。煤掃の頭巾の菓子袋も塵を  
 おろり。つひ物も氣とらうて。齒ぎり。髪を。鱗あれを  
 門も松の枝をそえて。信心づる。乃鯛あり。破魔弓も絳紅  
 の鉢巻を。土牛蒡も藁の股引を。きて。いそじ  
 け。年の瀬や。ひよめのむ。鶉のかりひ。ゆれを。一休乃



土器も工面よく胸箕用書出しをくり返して  
 常の心乃おき所の無分別なる仕業をくらやめや  
 おく露の質くさもあられを。借錢の山高くと大晦日の  
 谷深く。唯やん酒の声上戸は涎をかぐさし。貸餅の音  
 下戸の耳をよらぶーむの。拔足も鳥さしも。碁ごん  
 しくひし隠居さぬも。心の師走いあてかりぐりごとと  
 けらる世話を焼飯は。煮花をかけて腹をはらる。寒  
 念佛も祓ぐりに飯り。漬菜く納豆の声さくさむれ

朝まごき。鍛治屋の子んカウ。米屋の白世間の夜るハ  
 こらの昼雀のまらふ節季休も。サツサとやきあれや  
 我活業をとげまを頃

# 山東京傳再志



備書橋本徳瓶





江戸

山東京傳戲作

歌川豊國戲画



京傳商店物

讀書丸... 京傳自画... 京山... 京傳店... 物商店傳京

文化七年庚午冬十二月發行

江戸小舟町二丁目中之橋通

地本問屋

文龜堂

伊賀屋勘右衛門板

文化八年辛未春 新板中本目錄

腹筋逢夢石 初編 中本 歌川豊國 画

同 逢夢石 二編 中本 歌川豊國 画

同 逢夢石 三編 中本 歌川豊國 画

十二支之技 腹佳話 鷓鴣 藝初編 中本 歌川豊國 画

世帯道具 鷓鴣 藝臺 所譚 二編 中本 歌川豊國 画

同 鷓鴣 八藝臺 所譚 三編 中本 歌川豊國 画

逢夢石 座敷藝 忠臣藏 前後 中本 歌川豊國 画

地本問屋 小舟町二丁目中之橋通 伊賀屋勘右衛門板



